



Title	折々のうた
Author(s)	綿谷, 善平
Citation	懐徳. 1961, 32, p. 91-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

折々のうた

綿谷善平

唯在れば我執いつしかうすらぎて心幼くなりにけるかな
雨ながら遠くゆふべの蟬なきて依水園の合歡花開きたり
轟然と明月墜ちよ盛り場に舞めきあひて人空を見ず
うとましく疊れる日なり無花果に低く鳴けるは失意の鶲
か

若楓しづきにそよぎ黒蜻蛉たちてはとまる瀬の岩端に
ギアマンのコップの清水こくこくと酒にほてりしのど通
りゆく

瑞雲に舞へる飛天の姿して睡れる幼な夜具を蹴返す
白砂に石十ばかり起伏せり隻手の聲聞けこの石庭に

五十六億七千萬年はやもすぐ龍華の用意調はなくに（夢
中述懷）

葉櫻の蔭の厩に神の馬やるせなげにも瞬きにけり
思ひきやわが下腹の眞白きに星斗の如き死黒子出づ

石佛脣より春の苔のびて施無畏の印に木洩れ日動く

折々のうた

一山の天魔破旬もひそまりて聞きてやあらん磬を打つ音
二上の山の秀とたつ一つ杉大津の皇子の圓墳の杉

二上の山の台地の圓墳に大和にそむき皇子ねむります

龍膽の花さく山の山の尾に並ぶ塔見ゆ電車ゆく見ゆ

木枯の巷にうつる我の影たよりなげなり杖あげて打つ

溝にかけ出せるバラック灯がともり硝子戸に酒といふ字

現はる
調子よき脱穀機かな早苗より育てし稻の米となる音
くつきりと淡路が見えて霜よけの霜光り居る濱のみつば
畑

臨終の妻の額をなでしより既に三十年わが掌歛めり
徐ろに涉る淺瀬の河の石まろやかにして足に親しき

晝の月ひとたまりの水にうつりゐて大竹簾の落葉ちりく
る

天誅組の船を繋ぎし櫓朽ちて碑淋しさみだれにぬれて